

たかさご史話 33 播磨国福泊

南北朝期に編纂された播磨国の地誌「峯相記」には、加古川河口のほど近くに「福泊」とよばれる瀬戸内屈指の港の存在が記されています。福泊は、現在の姫路市的形町福泊に比定されています。

この港を築いたのは、執権北条時頼の被官であった安東蓮聖（一二三九〜一三二九）でした。かれはまた、近江国堅田浦（現、大津市）で延暦寺僧と結びつき金融業をも営んでいましたので、そこで得た「数百貫の銭財」を用いて、

一三〇二（乾元元）年「福泊の嶋」を築き、大型船が停泊できる大規模な港湾整備を行ったのです。「峯相記」には「兵庫嶋」にも劣らぬほどの港と記されています。この事業は、政治力と経済力を兼ね備えた蓮聖であったからこそ可能であったといえるでしょう。

ところで福泊は、瀬戸内を往来する多くの船が停泊し、富裕な商人や運送業者が多数居住して、港湾都市として発展していました。元亨年間（一三二一〜二四）には大和の興福寺が関所を設けて関税を徴収していたことが知られます。また、一三二八（嘉暦三）年には、蓮聖の嫡子安東助泰が福泊の屋敷地から三年間で六〇貫文の税を徴収していました。

しかし港湾の継続的な維持管理が行なわれなかった結果、一四世紀半ばまでにその機能を縮小せざるを得ない状況に陥っていました。「峯相記」はその様子を次の様に記しています。「賀古河尻の砂、浪に寄せられて、島の内埋まりて、大船出入りせず。次第に衰微するなり。」

（高砂市史編さん専門委員

梶木良夫）